

的なブランクもあるが、はなからうかと考へる。

工業立地要図 (日本産業図説)

条件	原料豊富	燃料豊富	用水豊富	陸上輸送便利	海運輸送便利	消費地に近い	労働力豊富	気候適切	公署処理容易	用地広
紙	◎		◎	◎	◎	○			○	◎
硫酸	◎	○	◎	◎	◎	◎			○	◎
糖	○	○	◎	◎	○				○	◎
糸			◎	○		◎	◎	○		◎
綿紡績			◎	○			○	○		◎
製糖	○	○		◎	○		○			◎
造船	○	○		○	◎		○			◎
電気機械	○		○	◎			○			◎
セメント	◎	○	○	○	○	◎				◎
石油			◎	○	◎	◎			○	◎

◎ とくに重視 ○ 重視 ○ 普通以上

八月十六日の読売新聞の大分版に「伊予き声は、公署に佐伯市民は怒りを」の記事は、佐伯市民の怒りや市民運動としての未組織化と反省させられる機会である。公署である新聞だからこそ思切つたことを直言し、また人々に犬吠を厭憎を及ぼしていると思つて注意を向けたいのである。九州最大の組織をもつという佐伯消費生活協同組合や「佐伯市を育てる会」等、とくに佐伯市における大規模な建設の抵抗ぶり、西南戦争のさい賊軍に對して結束して當つたもの無縁ではなさそうに、おの地味な佐伯人の市民性か、そんなところに社会正義の火を吐いているのではないか。両者はそれぞれ複雑な利害関係

もあるらしい。しかし工場進出以前はこのような激しい抵抗ぶりを示しているのは、全国でも珍らしいというところである。こんな点に佐伯市民と佐伯市民のアイデンティティが出てくるような気がする。佐伯市はあまりにも工場と地理的に疎遠であり、市民は精神的に疎遠であるのではないかと思ふ。

港は佐伯の表玄関であるはずだ。

以上のように、佐伯の工業立地の地域的特色は、立地論上には志まれているが、それとよりまく産業風土、とくにその主要とす地域住民や市政の方に関心点があるように思われたい。

(前号正誤)

十五ページ下段、終りよか三行目、朝霧をついてと鶴谷港を、とあるところ、編集者の不注意から一行脱落しました。お心申します。次の通り。印の字挿入して下さい。

朝霧をついて、風勢よく小波をたけつて、走る漁船。漁船は鶴谷港を斜に横切つて、とあります。

記録

漁村の迂蘭盆

一 鶴見町羽出浦のいろいろ

社会費助会員 安部 弥右衛門

(鶴見町羽出浦・八十三才)

この地方で昔からつづいて、正月、三月節句、五月節句、六月夏祭、七月迂蘭盆、九月秋祭など、生活に直接つながら行事といえよう。そして長い年月を経過間にこれらの行事も漸次簡素化されて、いかに迂蘭盆だけが他の行事にくらべて、影響が少なく様である。

このことは御土下のためには鈍しく思うが、仔細にその内容について今昔と考へ合せて見ると、成つてゐる点も少なくなない。試みにその或る部分について、明治年代と昭和十五年の今日とを比較して見よう。

遷葬盆とは一般に旧暦の七月十三日から十五日までの三日間を指して言つてゐる様であるが、当地の盆行事は旧暦七月七日から始まり、七月二十五日に終るようである。その間の行事をあげると、

(1) 旧七月七日 各家ともこの日は墓所の掃除をする。平素は無縁墓のように雑草に埋れてゐる墓も、この日からきれいにする。

この掃除の時に感ずることは、黙々と草を刈つてゐる人も、雑草を抜き取つてゐる人も、その顔には柔和な親近感があるように見え、掃除を終つて帰りに行く人々の顔にはいかにも満ち足りた様子がうかがわれる。

(2) この頃から木立方面の農家の人達が、墓に供える櫛の柴を売りに来て市場で市が立つ。各家はこの櫛を買つておき、十二、三日頃墓所に供える。(当地の山には櫛の自生が多いので、平素は「ばいの木」を供えてゐる。)

(3) 他の地方では十三日の晩は各自墓参して、墓所に灯籠、線香、水などを手向け、迎え火を焚いて精霊迎へをするが、当地ではこの日は、お寺の行事をせず、家の縁側に吊してある灯籠に迎え火を照し、仏壇には供物、灯明、線香などを捧げる。

新盆を迎えた家の仏間、縁側には、特に沢山の灯籠に灯がともり、何とも形容し難い床もささとしさとを感じる。この地方でも新盆の家に灯籠を贈る風習は、昔から行われていたものであろう。其人の歿後初めて遷葬盆を迎える仏のある家を、新掃霊の家といひ、親族知己等から灯籠を贈る風習で、家によつては仏間、座敷、縁側、テラスなどに置いてたり吊つたりして、また

場所が足らぬというようなこともある。

昔はさまで豪華な灯籠はなかつたが、現今は豪華で高価な灯籠の贈進が行はれてゐる。この灯籠の贈進は無用の冗費であるとして大正の初め以来貯蓄奨励、生活改善等の申合せにより幾度か廃止と決議したこともあるが、その実行は三年も続かず、亦旧態に復するといふ事實は何を意味してゐるか。簡單に解釈出来ぬ。外から見ると冗費と見えぬ灯籠も、悲愁に閑ささかしている家人としては、多数の灯籠に一斉に光りが点せられた時、いい知れぬ心の慰めと安らぎとを感ずるのではないだろうか。

(4) 十四日、十五日の夕刻の、墓所参拜の人出はかたなり多い。日没頃から、老人、壮年、青少年の男女が、線香、小提灯、コーソクなどを持ち(中には水桶を携へる人もある)其の上他府県に勤務してゐる人、他府県に転住してゐる墓参の爲に妻子とつれて歸郷してゐる人か多いため人数は意外に多い。

そしてこの晩は自家の墓所ばかりでなく、縁故の深い親族の墓、生前親交の厚かつた知人の墓にも詣り、墓所から帰れば親近な家の仏壇にも参拜して香華を手向けると人もあり、この二晩を参拜行事には、何か言ひ知れぬ心暖まるよみを感じずる。

そうしてその夜、踊りがあはれば踊り場に行つて踊るもの、涼みながら踊りを見物するもの、太鼓打ちを見るもの、音頭を聞きながら陸におぼてある船で涼んでいる者などが大部分で、家で話してゐる者は少くない。部落の踊りが多い時は多くの青年男女は伴をたつて隣りの部落まで出て出かけて踊りに加はる。盆踊りについては別記する。現出浦では明治の頃は盆踊り場は下町の浜にあり、東海道の宿

中越の庵の前で盆踊をしていたが、丈正の頃から羽出浦の敷場、大倉の西部落は地下とは別に、敷場の浜場で盆踊りをする様になった。そして日時は地下が十四日、敷場が十五日に踊りをする様になっていた所、後年敷場が十四日に踊りようになつた。

地下の方も後前のように十四日に踊つていたが、敷場羽出の地下、中越が同じ様に踊りをする代ば、人数の少ない敷場、中越の二部落は支障なく出来るが、一番人数の多い地下の踊りが出来かねるのである。その理由は、中越と敷場部落には、盆踊り音頭をとる人が多し、地下には音頭をとる人が少ないので、自然踊りが出来かねる事になる。それで今は地下が十五日の晩、他部落から音頭とりの助勢を迎えて踊りをする事になつた。

精霊送りは、大抵十六日の午前三時から四時頃にする様である。新盆を迎えた家で日手のこんた木の船を造つたり、買ったたりして、この船には西方丸とか極楽丸とかの船名をつけ、いろいなる供物を積みこみ、何本かの蠟燭を立てて灯とともし、帆柱に簡單な帆を張つて海辺から流す。

材の子供達はあらかじめこの潮流す船の良し悪しを知つており、数人一組が小船に乗り、拾得の良い船の流すれぬのを待ち受けている。今流したばかりの精霊船といふく目の前で子供達に拾い上げられるのを快しとしない人は子供達に頼むか、特に小船に積んで沖に出て精霊船供すものもある、一拾いあげた船を子供たちは玩具として持ち遊ぶ。一般の家では、簡單な船様の箱やボール箱などに入れて流す向きもある。

そうして流された海辺に必ず一束の線香を立てられ、香煙が夜嵐に流され、遠ざかりかく船の後を追つていく

ようである。明け十六日の昼間は、部落中のお婆さんたちは福聚庵に参詣して、念佛、回向などの行事がある。

それから二十四日、二十五日を迂蘭盆といつて、庵でも家庭でも仏祭りの行事があり、これが終れば盆日すんだことになるが、どうしてこの二十四、五日を「うらばん」といふか分らない。

以上の盆の行事は、現今では一と月遅れの八月を旧曆七月に代えて行つている。

序でに盆踊り其他参考として記して見よう。盆踊りは何れの時代に何処で始まつたものか、今も香港あたりで盛んに行われているなどの点から考へると、昔仏教の最も盛んであつた印度辺で始まつたものではあるまいか。これは記録では無く、後世に創作されたもので信ぴよな価値は極めて低いとは思ふが、盆踊り音頭の木蓮尊者の口説にある、天竺舍國の國、祇園精舎で木蓮尊者の母親、餓鬼道に落ちたのを救うために踊りとした時に、盆を持って踊つたのが盆踊りの名の出発点であるように書いてある。その真疑は私共共知し論ずる資格がないので、聞くことにし、唯常識的に考へて、盆踊りは専ら佛の供養の爲に催され、これが大衆の娯楽の爲とする傾向は近に打つてではないかと思ふ。

起因が仏教関係からとすれば、遠い時代に印度又は中國あたりで出来たものが仏教と共に日本に入つて来たものであるまいか。おか郷土でも江戸時代には仏の供養として踊つていたであろう。それが追々娯楽性加つたよう、今日では甚しい所では専ら觀光客集メを催しと

して使っている所もあるようた。

私の部落羽出浦の踊りの場所は一地下の浜」という広場である。昨年海岸寄りに県道が開通するまでは、ここが部落の船引場であり、物干場でもあった。

この広場の真中に長い丸太樁をたて、横木を組んで音頭棚をつくる。(盆踊りの世話に昔は若連中かしていたか、明治時代の終り頃からは青年団や消防団の何れかかするこゝになつた。)

音頭棚は二階建式であり、地面から棚の高さ一・二〇米位、広さは五、〇平方米(長方形)、二階の広さは三、三〇平方米程。それ／＼座敷を敷く。そしてこの棚の西側に接して太鼓を置く場所を作り、周囲には網船の立幟を張りめぐらし、又は樹てまわして豪華な外観を表す。この音頭棚の上端から四方に長い細引を張り、それに盆燈籠や電球を沢山着けて、踊り場の照明と装飾とを兼ねる。実にきれいである。

音頭棚は音頭をとる人のおる場所で、うちお片手に立つて音頭をとっている人の外は、みんな腰掛に腰かけて自分の番を待っている。

二階には位牌を祭る棚を設けて、昨年の盆以降に物故した新仏の位牌を、踊りが始まる時から終るまで安置し、踊りの終る少し前頃、和尚さんが二階に上り、読経回向をする。踊りがすんで和讃が終ると、位牌とそれぞれ家族に渡して家に持ち帰らせる。

又音頭棚の南側には腰掛を並べて、音頭をばやす小供達のおる場所にする。(昔は蓮としいていた。)

大太鼓の場所には、天満宮の大太鼓(長さ八七程、口径七〇程、胴廻り三七程)を置き、腕自慢の男達が集まり、汗を流して打つ。又それを見物して楽しんでゐる連中も多い。それ

は踊り太鼓に自信をもつものが交る交る大太鼓に似、両脚を左右に踏んばつて、或は跳躍しながら懸命の力で強く打つ。音頭を合せて

ドン、ドン、ドン、
ドンドン、ドン、ドン、
ドンドン、ドン、ドン、
ドンドン

と、強んど強いド音で打ちならすので、厚い牛皮を張った大太鼓の高い音に付れて、音頭の声も高くなる。漁村の踊り音頭の声は海上半里以上、太鼓の音は三里以上も聞こえる。血気盛んな青年の力強い、日本錦の後銚巻をしめ、時には踏足になつては古拙きも巧みに跳躍しながら太鼓を、(交る)打っている勇壮な姿を見ていると立ち去るのを忘れる程にもある。
これは農村や市部の踊り場では見かけ得ぬ風景であり、テレビ映画の良い題材ではないかと考へる。

この中浦地区で普通愛用されている音頭は次のようなものである。

- 一 おしよいかめい 六 牡丹長者
- 二 お鳥、伴蔵 七 白石
- 三 炭焼小五郎 八 石壺丸
- 四 奈須兵市 九 俊徳丸
- 五 自鹿おとし 一〇 地藏和讃

(外にも三三あるが余り使わないで省略する)

当地の踊りは三つ拍子という踊りで、基本そのまゝに踊れば実に優雅で、現在且基本通りに踊る人は老人だけであり、ほとんどは上手な人二十人に足りない。郷土芸能保存の爲、一考を要するべきである。記事が因らず脱線したようであるが、前に記した音頭棚の中に、その周囲に二重又は三重の踊りの輪が出来る。
見物人はその踊りの輪の外側に立つて見る。見物に飽

けだしばらく家に帰るか附近を散歩して、また立ち戻つてみる。踊りに格別興味がないとか、音頭を生を聞きたいと云う人は、すぐ傍の船曳場の船の上から聞いていたが、今日船曳場がなくなつてゐるので、こんな人たちは都合が悪くなつた。

この盆踊りの世話をする団体の役員も田舎は、登も夜も汗をかくに直つて、会場設備の器具運搬、音頭棚の建設、寄附金や採出金の取りまとめ、焚出しへ振り飯作り、これ又婦人会員に頼む、酒や振り飯の配給へ会場におる全員に配つてすすめる、踊りの勸奨など。これらの人々は超重労働である。

「見物人に酒の無理強いは止したらどうか」という説も出たが、見物人にも勧めて飲ませれば踊り会場の活気がなくなるので止めぬ方がよい」ということになり、見物人にも無理に勧めて飲ませる習慣は、今も残つてゐるようである。へそれでも明治、大正の頃は「一と踊りし左か金が沢山残つてゐるから、また一と踊りしよう」といふ一盃に二踊りへ二回催すことが折々あつた。

前に記したように、昔は盆踊りは先祖の供養を主にしていたようであるが、近年は供養は従で、娯楽としての方が主という考え方が変つてゐるようである。その一例は大正の末期から昭和の中頃にかけて、僅々経済上の理由による踊り行事の経費縮減説が提案されたが、その度毎年の盆踊り行事に経費上の縮減を加えれば、男女青年は盆時期に於ける娯楽の希望を失せ、その為に出稼ぎしてゐる青少年の御土産に悪い影響を与えて、盆には御土産に帰るといふ楽しみを失せさせる結果になるから、盆踊

りの経費に縮減を加へることは慎重な考慮を要する。」といふ説が多数を占めるので、縮減説は成立しないまま今日に到つてゐる。この論拠を裏証するかのようには、地府県に居住してゐる人達が、何年振りか家族を伴つて御土訪問をするのは、正月よりも盆の方がはるかに多い。これ等の点を考へると、盆踊りは郷土芸能の一つとして永く村に依存するものが良くはないかと思ふ。祖先崇拜の觀念が薄れ、また他郷におる人々が御土産を忘れぬ為にも

このように盆踊りを、郷土芸能、無形文化財として保持するにあつては、次の二つの問題がある。その一つは音頭をとる人の養成であり、今一つは現今の乱雑な踊り方を改めて、昔の優雅な踊りの姿にかへることである。

明治、大正の頃は、この地方の盆踊りは最も盛んに行かれ、羽出部落には音頭とり、太鼓打ち、踊る人など、上手な人が多くいた。其の後敷場部落と盆踊りを別にするようになつてからは、地下的方には音頭をとる人が少なくなつて、今では他部落の応援なしでは踊りが成り立たなくなつてゐる。踊りについては、羽出部落の踊りは三つ拍子といい、それを基本の通り踊つては州治の頃の踊りは実に優雅であり、他府県の踊り会など、このかゝる集団就職してゐた青少年女子達が、一団となつてこの三つ拍子の踊りをすれば、いつも観衆の絶賛を博してゐたといふことである。ところが、大正、昭和と時代の移るにつれて、踊り方が不真面目になり、漸次それと同化されて、三つ拍子本来の型は崩れ、又は故意に乱雑な踊り方をする人があり、今では三つ拍子本来の型に叶はずな踊り方としてゐる人は、会場内に数名いるか、いな

めで、今のうちに次の世代の人達に受け継いで貰うこ
とが緊要であるとして、羽出老人クラブ創会の話し合い
で、キマリ、この旨を婦人会に譲り、婦人会もこれにつ
いて協議したようであつたが実現せず、そのままになつて
いるのは惜しいことである。

この練習問題の進まなかつた一つの理由は、基本の型
を難かしくいつて特別に練習なんかすれば、これに知ら
なく、上手に踊れないものは、遠慮して踊りの場に参加
せぬものが多いなり、却つて踊りがさびれるのではな
いか——という意見があつたように聞いている。

(筆者の考えでは、健康な老人クラブの婦人と婦人会
員とが練習し、出来得れば幼稚園児、小学校児童及
中学校一二年生の参加が望ましいが、これは家庭、
学校と話し合ひする必要があると思う。)

盆踊りの終りに唱える、一種の哀調を帯びて、何とな
く深い御愁を覚える和讃を頭に浮かべつつ、筆を擱くこ
とにする。

(附) 廢れてしまつた盆期ノ行事

今は昔、明治時代の頃のことである。

その頃の網船は、二艘の船を並べ、特別に太い葉網で
ぎ合せ、これを一帖、又は一掛、といひ、大船といつた。

艘の笠水には

○大黒網

ノ様ま、木綿製の太織

と圓葉と一本宛掛て、船の舳の先端に立て木(とが)には
「さかり」といふ径一程位の椽椽の繩を寄せ合せて長く
つくつてある、船の化粧専用のものを舳先から長く垂下
し、各船の艘の間と舳の間を外側に張り出して設けてあ
る台木に取り付けてある化粧板に彫り込んである唐草模

様の彫り物に、赤、青、緑などのペンキを濃く塗り、彩

色を新左にして部落の浜辺や、定錨場の岸頭に繋留して
おつた。

(この船の形状と各部の施設、名称等は、故青木勝氏
が「さびれ行くジヨウヤウ踊り」と題して書かれ、
挿絵と説明をしてくれている。「佐伯史談」第五十六
号一〇ページ御参照のこと。)

こんな時には材の子供たちは、この化粧を新左にした
網船に乗つて見たり、船から海に飛び込み、その周辺を
泳ぎ廻つたり、又船に乗つて遊ぶなどして楽しんでい
たが、何時とはなしにこんな風習はなくなり、今はその懐
かしい網船さえもこの海岸から全く姿を消してしまひ、再
び見ることもできない。

次は、部落の子供同志又は青年同志で行なつていふ船
の競漕があつた。

或る部落の青年又は子供達が、競漕の目的で隣り部落
の沖合に一艘の船を漕ぎ出して、南へ北へと漕いで休
み、休んで又漕ぎ、暗に競漕を促している、陸上か
ら見たその部落の子供又は青年達は、これに志づいて急い
で船を用意して沖に乗り出し、互いに船を漕ぎ寄せて競
漕を始める。部落の人たちは浜からこれを眺めて声援を
する。(彼の隅田川の学生も競艇を思わせる。)二三四
競漕の後、競漕を止めて各自部落に帰つて行く。これも
一つの漁村風景であつた。

その外、盆の十五日には各家長は、氏神社と福聚庵を
はじめ、近親者の家を廻り仏壇を拜し、家人と挨拶を交
す慣例になつていたが、今は僅かに一部の人達に残つて
いるだけである。

(以上)